

# 屈原像の中国文化史上の役割:漢代における祖型の登場

The Emergence of the Image of Quyuán in the Han Dynasty

田 宮 昌 子

文人、士大夫、読書人……時代により、また具体的指示範囲の違いにより、異なった呼称が使われてきたが、これらの人々は、文盲率が歴史的に高かった中国において高度な人文的教養を身につけた少数の人々であり、官僚として国家の経営に携わる能力と可能性を基本的に持っている。彼らは秦漢帝国以来、中国文化形成の主力となってきた社会集団であり、儒学に表われているように積極的に社会に関わり〔入世〕<sup>rushi</sup>、自己の才を発揮することに人生の意義を置いた。道家に代表される隠棲〔出世〕<sup>chushi</sup>の態度は、あくまでも前者が叶わない時の二次的選択肢である。そのように社会に関わること(広い意味での政治)に志を抱くよう方向づけられる彼らには、挫折や受難が付きまとう。かくして、失意の男子が己の志をうたう「悲憤慷慨」の情が生まれる。この「悲憤慷慨」の情は、有史以来の長い時間的経緯の中でそれを以って記される事例を蓄積しつつ、一つの系譜を形成してきた。この系譜上には「悲憤慷慨」の意境を象徴するいくつかの英雄的形象が現れたが、なかでも屈原は漢代以降現代までの長い伝承期間を持つ。小稿は中国文化の特質の一面を考察する有効な切り口として、この屈原像に注目し、漢代における屈原像の祖型の登場についてまとめようとするものである。

キーワード：悲憤慷慨、祖型、伝承、変遷と一貫性

目 次

凡例

はじめに

I 基礎資料

II 屈原像の祖型

おわりに

## 凡 例

- ・本文中の中国語は〔 〕で囲んで示すが、日本語の語彙に吸収されて音読が通行しているものについては、「 』で囲んで漢語として扱う。例：〔出世〕<sup>chushi</sup>、「悲憤慷慨」
- ・参考文献の書名及び編著者名の表記は使用した版の書体（日本語常用漢字、中国語簡体字・繁体

字など)に従う。出版年の年号も使用した版の記載(日本元号、西暦など)に従う。

## はじめに

文人、士大夫、読書人……時代により、また具体的指示範囲の違いにより、異なった呼称が使われてきたものの、しかし、これらの呼称で呼ばれる人々には、一貫した中心軸というか、共通項があることは、大方の同意を得られるであろう。彼らは、文盲率が歴史的に高かった中国において、高度な人文的教養を身につけた少数の人々であり(本人の願望の有無やその機会に恵まれるか否かとは別に)、官職に就いて体制の経営に関わる能力が基本的にある。彼らは秦漢帝国以来、中国文化形成の主力となってきた社会集団であり、儒学に表われているように積極的に社会に関わり〔入世〕<sup>rushi</sup>、自己の才を発揮することに人生の意義を置いた。道家に代表される隠棲〔出世〕<sup>chushi</sup>の態度は、あくまでも前者が叶わない時の二次的選択肢である。そのように社会に関わること(広い意味での政治)に志を抱くよう方向づけられる彼らには、挫折や受難が付きまとう。かくして、失意の男子が己の志をうたう「悲憤慷慨」の情が生まれる。この情緒は、一種の悲壮美を伴って、男女の恋愛が正統的な中心テーマとならなかった中国文芸においてロマンティシズムを醸し出す重要な要素となってきた。この情緒が、社会の運営を担う人々の挫折や受難に対する正統的な反応パターンとして社会的に肯定されてきたことは、中国文化に一つの特徴的性格をもたらしているように思われる。この「悲憤慷慨」の情は、有史以来様々な形式の文字資料の中に書き留められており、長い時間的経緯の中でそれを以って記される事例を蓄積しつつ、系譜化してきた。それは今日では一種の“民族の記憶”的役割を付与されてすらいる。

小稿は、この「悲憤慷慨」の系譜を屈原を切り口として見てみようとする試みの一端である。この系譜上には「悲憤慷慨」の意境を象徴するいくつかの英雄的形象が現れたが、その中で屈原は岳飛のような武人ではなく、文人であり、重臣として楚の国政に携わったともされている。また、民間伝承と結びついて、端午節の中心人物ともなっている。このように、屈原像は中国文化における大伝統を体現する形象であると同時に、小伝統にも深く浸透している。屈原は前漢にはすでに文人たちが我が身を嘆いたり、鼓舞したりする際に登場する名となっており、その伝承は前漢以来現代まで行われてきた。このようなことから、屈原は中国文化史の一側面における一貫性と変遷を見ることが出来る有効且つユニークな切り口たりえるのではないかと思われる。

屈原という人物と彼の作とされる賦については、二千年に及ぶ鑑賞と批評、研究の歴史があるが、屈原の実在を疑う議論もある<sup>1</sup>。だが、一つ確かなのは、司馬遷の『史記』が書かれて以来、「二千年に及ぶ鑑賞と批評及び研究」の対象とされたものが「屈原」と呼ばれてきたという点において、屈原は“文化的”には厳然として存在したということである。その文化的生命は、彼が投身自殺を遂げた(とされた)ことで生まれている。この研究の関心は、屈原の実像如何や作品の考証にではなく、入水後に生まれた「第二の」屈原、つまり後代の人間によって受け止められたイメージにある。

本研究の全体計画は、古典期・近現代の二部構成とし、古典期については、漢代における屈原像の形成とその後の王朝期における伝承とを二段階に分けて扱いたい。小稿「漢代における祖型の登場」においては、まず一章で先秦期から漢代までにかけて行われた屈原及び屈原賦理解を伝える文献史料を、二章では様々な価値観の祖型を中国文化史に注入した司馬遷『史記』における屈原像を検討する。

## I 基礎資料

先秦期から漢代までにかけて行われた屈原及び屈原賦<sup>2</sup>理解を伝える文献史料を年代順に検討する。

### 1. 「離騷經章句」或いは「離騷傳」

撰者：劉安。前漢（前179～前122年）淮南王、『漢書』巻44に伝あり。

書は亡んだが、一部が王逸『楚辭章句』に収められた班固の「序」中に引かれるという形で後世に伝わった。「離騷」評としては、今に伝わる中で最も早い。司馬遷『史記』「屈原傳」中にはほぼ同文があり、司馬遷が劉安の文を引用したものと考えられている。王逸『楚辭章句』では「離騷經章句」、班固「序」では「離騷傳」と呼んでいる。

王逸『楚辭章句』巻一引、班固「序」

班孟堅序云，昔在孝武博覽古文，淮南王安叙離騷傳以國風好色而不淫，小雅怨悱而不亂，若離騷者，可謂兼之，蟬蛻濁穢之中，浮游塵埃之外，皜然泥而不滓，推此志，雖與日月爭光可也

### 2. 『史記』巻八十四「屈原賈生列傳」

撰者：司馬遷。前漢（前145～前86年）字子長。『史記』巻130「太史公自序」に自伝あり。

今に伝わる屈原の伝としては最も早いもの。文中に楚辭「懷沙」「漁父」を引く。また、屈原の賦や人格を論じた一部分が王逸『楚辭章句』の指摘により、劉安「離騷傳」からの引用とされている。次章で詳しく見ていく。

### 3. 書名不詳

撰者：劉向。前漢（前76～前5年）字子政。『漢書』巻36「楚元王傳」に伝あり。

書は亡んだが、下に挙げた王逸『楚辭章句』「叙」の記述から、楚辭としての初めての集であること、16巻であることが知られる。16巻の内訳は、現存の王逸『楚辭章句』17巻から王逸「九思」を除いた、屈原「離騷」「九歌」「天問」「九章」「遠遊」「卜居」「漁父」、宋玉「九辯」「招魂」、屈原<sup>3</sup>「大招」、賈誼「惜誓」、淮南小山「招隱士」、東方朔「七諫」、嚴忌「哀時命」、王褒「九懷」、劉向「九歎」と考えられている。

王逸『楚辭章句』「叙」

……屈原……作離騷……遂復作九歌以下凡二十五篇，楚人高其行義，瑋其文采，以相教傳，至於孝武帝，

恢廓道訓，使淮南王安作離騷經章句，則大義粲然，後世雄俊，莫不瞻慕，舒肆妙慮，續述其詞，逮至劉向，典校經書，分爲十六卷

4. 『離騷章句』

撰者：班固。後漢（32～92年）字孟堅。『後漢書』卷70に伝あり。

佚書。「序」「贊序」が王逸『楚辭章句』に収められ、今に伝わる。

「序」

班孟堅序云，昔在孝武博覽古文，淮南王安叙離騷傳以國風好色而不淫，小雅怨悱而不亂，若離騷者，可謂兼之，蟬蛻濁穢之中，浮游塵埃之外，矚然泥而不滓，推此志，雖與日月爭光可也，斯論似過其少，而眞，又說五子以失家巷，謂五子胥也，及至羿澆然猶未康，貳姚有娥佚女，皆各以所識，有所增損，然猶未得其正也，故博采經書傳記本文，以爲之解，且君道窮命矣，故潛龍不見是而無悶，關雎哀周道而不傷，蓬瑗持可懷之智，甯武保如愚之性，咸以全身不命避害，不受世患，故大雅曰既明且哲，以保其身，斯爲貴矣，今若屈原露才揚己，競乎危國羣小之間，以離讒賊，然責數懷王，怨惡椒蘭，愁神苦思，強行之非其人，忿懟不容，沈江而死，亦貶絜狂狷景行之士，多稱崑崙冥婚，宓妃虛無之語，皆非法度之政，經義所載，謂之兼詩風雅，而與日月爭光，過矣，然其文弘博麗雅，爲辭賦宗，後世莫不斟酌其英華，則象其從容，自宋玉唐勒景差之徒，漢興枚乘司馬相如劉向楊雄，聘極文辭，好而悲之，自謂不能及也，雖非明智之器，可謂妙才者也

「離騷贊序」

離騷者，屈原之所作也，屈原初事懷王，甚見信任，同列上官大夫妬害其寵，讒之王，王怒而疎屈原，屈原以忠信見疑，憂愁幽思而作離騷，離，猶遭也，騷，憂也，明己遭憂作辭也，是時周室已滅，七國並爭，屈原痛君不明，信用羣小，國將危亡，忠誠之情，懷不能已，故作離騷，上陳堯舜禹湯文王之法，下言羿澆桀紂之失，以風，懷王終不覺寤，信

反問之說，西朝於秦，秦人拘之，客死不還，至于襄王，復用讒言，逐屈原，在野又作九章賦以風諫，卒不見納，不忍濁世，自投汨羅，原死之後，秦果滅楚，其辭爲衆賢所悼悲，故傳於後

5. 『漢書』卷二十八「地理志」

撰者：班固

始楚賢臣屈原被讒放流，作離騷諸賦以自傷悼，後有宋玉唐勒之屬慕而述之，皆以顯名，漢興，高祖王兄子濞於吳，招致天下之娛游子弟，枚乘鄒陽嚴夫子之徒興於文景之際，而淮南王安亦都壽春，招賓客著書，而吳有嚴助朱買臣，貴顯漢朝，文辭並發，故世傳楚辭

6. 『漢書』卷三十「藝文志」

撰者：班固

屈原賦二十五篇

7. 『楚辭章句』

撰者：王逸 後漢（官職：110～120年<sup>4</sup>）、字叔師。『後漢書』卷110「文苑傳」に伝あり。

17卷。今に伝わる中では最古の楚辭注釈書。「序」文に依れば、16卷であるが、現存の王注本は17卷となっており、王逸「九思」が加わっている。

「敘」

敘曰昔者孔子叡聖明喆，天生不羣，定經術，刪詩書，正禮樂，制作春秋，以爲後王法，門人三千，罔不昭達，臨終之日，則大義乖而微言絕，其後周室衰微，戰國並爭，道德陵遲，譎詐萌生，於是楊墨鄒孟孫韓之徒，各以所知，著造傳記，或以述古，或以明世，而屈原履忠被譖，憂悲愁思，獨依詩人之義而作離騷，上以諷諫，下以自慰，遭時闇亂，不見省納，不勝憤懣，遂復作九歌以下凡二十五篇，楚人高其行義，瑋其文采，以相教傳，至於孝武帝，恢廓道訓，使淮南王安作離騷經章句，則大義粲然，後世雄俊，莫不瞻慕，舒肆妙慮，續述其詞，逮至劉向，典校經書，分爲十六卷，孝章即位，深弘道藝，而班固賈逵復以所見，改易前疑，各作離騷經章句，其餘十五卷，闕而不說，又以壯爲狀，義多

乖異，事不要括，今臣復以所識所知，稽之舊章，  
 合之趣，略可見矣，且人臣之義，以忠正爲高，以大  
 指節爲賢，故有危言以存國，殺身以成仁，是伍行  
 伏胥不恨於浮江，比干懷道以迷國，詳愚而不言，  
 成榮顯而名著，若夫懷安，婉婉以順上，逡巡以避  
 顛則不能扶，危則不能壽百年，蓋志士之體清潔，  
 患雖保黃耆，終壽膺忠貞不隱也，而班固謂之露  
 所賤也，今若屈原，進不隱也，而班固謂之露，  
 若砥矢之行，俊彥之中，怨恨容納，忿恚自沈，是  
 誠絕世之小，不見容納，昔伯夷求於世而怨望，且  
 強非其清潔者，豈可復謂小子，於斯爲優游矣，  
 損其餓而死，嗚呼，屈原之詞，而論中矣，夫離騷  
 遂刺上曰，嗚呼，屈原之詞，而論中矣，夫離騷  
 耳，風諫之語，於斯爲優游矣，而論中矣，夫離騷  
 引此比彼，屈原之詞，而論中矣，夫離騷  
 故，欲提攜其人，殆失厥之苗裔，則將翔，佩玉虬  
 上，以立義焉，帝高陽以爲佩，則易潛龍就重沙，  
 娠也，紉秋蘭以御天，而涉流沙，則禹貢之數土也，  
 夕攬洲之宿莽，御天而涉流沙，則禹貢之數土也，  
 則時乘六龍也，登崑崙以御天，而涉流沙，則禹貢之  
 智彌盛者，其言博，才益多者，其識遠，士著造詞賦，  
 博遠矣，自終沒以來，祖式其模範，取其要妙，竊不  
 藻，所謂金相玉質，百世無匹，名垂罔極，永

## 8. 『隋書』卷35「經籍志」

楚辭者，屈原之所作也。自周室衰亂，詩人寢息，  
 諂佞之道興，諷刺之辭廢，楚有賢臣屈原，被讒放  
 逐，乃著離騷八篇，言己離別愁思，申杼其心，自

明無罪，因以諷諫，冀君覺悟，卒不省察，遂赴汨羅死焉，弟子宋玉，痛惜其師，傷而和之，其後，賈誼東方朔劉向揚雄，嘉其文彩，擬之而作，蓋以原楚人也，謂之楚辭，然其氣質高麗，雅致清遠，後之文人，咸不能逮，始漢武帝命淮南王爲之章句，且受詔，食時而奏之，其書今亡，後漢校書郎王逸，逸集屈原已下，迄於劉向，逸又自爲一篇，并叙而注之，今行於世，隋時有釋道騫，善讀之，能爲楚聲，音韻清切，至今傳楚辭者，皆祖騫公之音

### 9. 屈原賦をめぐる諸説

王逸『楚辭章句』に収められて今に伝わる楚辭のうち、いずれが屈原自身によって作られた“屈原賦”であるかについては諸説ある。

#### 1) 司馬遷『史記』

卷八十四「屈原賈生列傳」中に〔屈平疾王聽之不聰也，讒諂之蔽明也，邪曲之害公也，方正之不容也，故憂愁幽思而作離騷〕と「離騷」を作る経緯を述べて、文中に「懷沙」「漁父」<sup>5</sup>を引いた後、「太史公曰」で〔余讀離騷、天問、招魂、哀郢、悲其志〕としている。司馬遷が認めたことが確認できる屈原賦は、「離騷」「天問」「哀郢」「招魂」「懷沙」「漁父」の6篇となる。

#### 2) 『漢書』「藝文志」

賦の冒頭に「屈原賦二十五篇」とあるが、篇名は不明。

#### 3) 王逸『楚辭章句』

全篇に付された王逸の序文は冒頭に各篇の作者を述べる。うち〔屈原之所作也〕とするのは、「離騷」「九歌」「天問」「九章」「遠遊」「卜居」「漁父」「大招」の26篇。その内、「大招」については、〔或曰景差，疑不能明也〕ともする。

以上が漢代に考えられた屈原賦である。これら諸篇の内容が屈原像の祖型を形作る。後代の楚辭注釈、研究では屈原に仮託されたものとしてこれら諸篇から少なからぬ篇が除外される。

注：

<sup>1</sup> 屈原が実在したかどうかをめぐる論争については、趙達夫『屈原与他的时代』（人民文学出版社、1996年）の前言に、その歴史と各説の論点が実在説の立場からではあるが、よくまとめられている。

<sup>2</sup> 王逸『楚辭章句』が戦国の宋玉、景差らから漢の賈誼、東方朔、劉向らの賦を収めるように、屈原の後、その辞に習って創作された賦を総称して「楚辭」と呼ぶ。このため、屈原による創作とみなされた賦は区別のために「屈原賦」と呼ぶことがある。本稿では、屈原作と“みなされた”賦という意味で「屈原賦」を使用する。

- 3 王逸『楚辞章句』「大招」序文は、〔屈原之所作也。或曰景差，疑不能明也〕とする。
- 4 生卒年不明。110～120年の間、官職にあったことが確認できる。
- 5 本文中に「漁父」の篇名は明記されないが、今に伝わる「漁父」とほぼ同文が引かれている。

## II 屈原像の祖型

### 1) 司馬遷『史記』卷八十四「屈原賈生列傳」

屈原に関する伝としては、『史記』中のこの伝が今に伝わる中では最古であり、後代に書かれる伝のほぼ唯一のソースとなっている<sup>1</sup>。以下、司馬遷による屈原の評価及び解釈が入る部分を中心に検討していく。屈原の事跡を記載する部分については紙幅の関係上略述する。

#### 第一段 屈 原 者， 名 平……王 怒 而 疏 屈 平

屈原は名は平（原は字）。姓の屈は楚の王室と同姓である。楚の懐王の時、重臣となり、王の信任厚く、王と国事を共議し、外交も担当した。法令の起草という大事を任されるが、他の重臣の妬みを受け、王に讒言される。王は怒り、屈原を疎んずるようになる。

第二段 屈 平 疾 王 聽 之 不 聰 也 ， 讒 諂 之 蔽 明 也 ， 邪 曲 之 害 公 也 ， 方 正 之 不 容 也 ， 故 憂 愁 幽 思 而 作 離 騷 ， 離 騷 者 ， 猶 離 憂 也 ， 夫 天 者 ， 人 之 始 也 ， 父 母 者 ， 人 之 本 也 ， 人 窮 則 反 本 ， 故 勞 苦 倦 極 ， 未 嘗 不 呼 天 也 ， 疾 痛 慘 怛 ， 未 嘗 不 呼 父 母 也 ， 屈 平 正 道 直 行 ， 竭 忠 盡 智 以 事 其 君 ， 讒 人 聞 之 ， 可 謂 窮 矣 ， 信 而 見 疑 ， 忠 而 被 謗 ， 能 無 怨 乎 ， 屈 平 之 作 離 騷 ， 蓋 自 怨 生 也

屈平、王聽の聰ならざる、讒諂の明を蔽ふ、邪曲の公を害する、方正の容れられざるを疾む。故に憂愁幽思して離騷を作る。離騷は、猶ほ離憂のごときなり。夫れ天は人の始めなり。父母は人の本なり。人窮すれば則ち本に反る。故に勞苦倦極、未だ嘗て天に呼ばずんばあらざるなり。疾痛慘怛、未だ嘗て父母を呼ばずんばあらざるなり。屈平、道を正しうし行ひを直うし、忠を竭くし智を盡くし、以て其の君に事ふ。讒人之を聞す。窮すと謂ふべし。信にして疑はれ、忠にして謗らる。能く怨むる無からんや。屈平の離騷を作る、蓋し怨みより生ずるなり。

屈原賦の代表作である「離騷」が作られる経緯を述べる。「離騷」解釈の基調がここですでに出来あがっている。〔方正〕の士と〔邪曲〕な小人との対立、不明な君主、失意の憂い。屈原が君臣に仕えて、いかに〔正道直行〕〔竭忠盡智〕であるか、本文中に具体的記述はない。このため、〔信而見疑〕〔忠而被謗〕も上記の屈原の事跡のみからでは引き出すことは出来ない。これは「離騷」を屈原の自伝と断定し、その意境を前提として読込んで始めて成立する。

第三段 國 風 好 色 而 不 淫 ， 小 雅 怨 誹 而 不 亂 ， 若 離 騷 者 ， 可 謂 兼 之 矣 ， 上 稱 帝 嚳 ， 下 道 齊 桓 ， 中 述 湯 武 ， 以



刺世事，明道德之廣崇，治亂之條貫，靡不畢見，  
其文約，其辭微，其志絜，其行廉，其稱文小而其  
指極大，舉類邇而見義遠，其志絜，故其稱物芳，  
其行廉，故死而不容，自疏濯淖汙泥之中，蟬蛻於濁穢，  
以浮游塵埃之外，不獲世之滋垢，矜然泥而不滓者也，  
推此志也，雖與日月爭光可也

國風は色を好んで淫せず、小雅は怨誹して亂せず。離騷の若きは、之を兼ねと謂ふべし。上は帝嚳を稱し、下は齊桓を道ひ、中は湯武を述べ、以て世事を刺り、道德の廣崇、治亂の條貫を明らかにし、畢く見れざるは靡し。其の文は約、其の辭は微、其の志は絜、其の行は廉、其の文を稱すること小にして、而も其の指は極めて大。類を擧ぐること邇うして、而も義を見すこと遠し。其の志や絜、故に其の物を稱すること芳し。其の行ひや廉、故に死して容れられず。自ら濯淖汙泥の中なるを疏んじ、濁穢に蟬蛻し、以て塵埃の外に浮游す。世の滋垢に獲せず。矜然として泥して滓せざる者なり。此の志を推すや、日月と光を争ふと雖も可なり。

この段では、「離騷」の評価に始まり、屈原の人格評価に至る。下線を引いた部分が、第一章で見た①王逸『楚辞章句』に収められた班固の「序」中に引かれる劉安の文と重なる部分である。  
〔<sup>guofenghaoseerbuyin</sup>國風好色而不淫，<sup>xiaoyayuanfenerbuluan</sup>小雅怨誹而不亂。若離騷者，<sup>ruolisaozhe</sup>可謂兼之矣〕〔<sup>kewejianzhiyi</sup>雖與日月爭光可也〕は、「離騷」評の中でも最も早く、また最もよく知られる。李白の〔<sup>qupingcifuxuanriyue</sup>屈平詞賦懸日月〕（「江上吟」）のように、後代、屈原の人格の代名詞ようになっていく。

#### 第四段 屈平既……卒以此見懷王之終不悟也

この段は、楚の衰亡の過程を詳述する。齊を討とうとした秦は、齊と同盟を結んでいた楚に縦横家の張儀をやり、六百里の土地を条件に齊との断交を求めた。懷王は張の言を信じて、齊と断交し、土地を受けに使いを秦に送った。しかし、張儀は「約束したのは六里」と主張し、楚秦は戦いとなる。その戦いに乗じて、魏が楚を攻めたため、楚の兵は秦から引き上げた。その間、齊は楚を救わなかった。翌年、秦は漢中の土地を割譲して、楚と和睦したが、楚王は土地より張儀の引渡しを要求した。楚にやって来た張は側近の靳尚に賂し、懷王の寵姫鄭袖に説いて、ついには懷王に釈放されることに成功する。この時、屈原はすでに位についてはいなかったが、「なぜ張儀を殺さないのか？」と王を諫めた。王は後悔して張儀を追ったが追いつけなかった。その後、秦の昭王は楚と婚姻を結び、懷王と会見しようとした。屈原は秦行きに反対したが、懷王の末子子蘭が行くことを勧めた。懷王は秦に出かけたが、秦に抑留され土地の割譲を迫られる。王は拒否し、ついには秦で客死する。楚では、懷王の長子が即位して頃襄王となり、弟の子蘭を令尹（執政）とした。楚の国人は子蘭が懷王に秦行きを勧めたことで子蘭を非難した。屈原は子蘭を憎んだ。

この段では、楚の内政について、人名や他国との交渉が詳述され、懷王の無能さ、楚国の国政の乱れを印象付ける。

#### 第五段 人君無愚智賢不肖，莫不欲求忠以自爲，舉賢以

自佐，然亡國破家相隨屬，而聖君治國累世而不見者，其所謂忠者不忠，而所謂賢者不賢也，懷王以不知忠臣之分，故內惑於鄭袖，外欺於張儀，疏屈平而信上官大夫，令尹子蘭，兵挫地削，亡其六郡，身客死於秦，爲天下笑，此不知人之禍也，易曰，井泄不食，爲我心惻，可以汲，王明，並受其福，王之不明，豈足福哉

人君は愚智賢不肖と無く、忠を求めて以て自ら爲にし、賢を擧げて以て自ら佐くるを欲せざるは莫し。然るに國を亡ぼし家を破るは相隨屬して、聖君の國を治むるは累世にして見れざるは、其の所謂忠なる者不忠にして、所謂賢なる者不賢なるなり。懷王忠臣の分を知らざるを以て、故に内は鄭袖に惑ひ、外は張儀に欺かれ、屈平を疏んじて、上官大夫令尹子蘭を信ず。兵は挫げ地は削られ、其六郡を亡ひ、身は秦に客死し、天下の笑ひと爲る。此れ人を知らざるの禍なり。易に曰く、井泄くして食らはれず。我が心の惻みを爲す。以て汲むべし。王の明かなる、並びに其の福を受く、と。王の不明なる、豈に福するに足らんや。

第六段 令尹子蘭聞之大怒，卒使上官大夫短屈原於頃襄王，頃襄王怒而遷之，屈原至於江濱，被髮行吟澤畔，顏色憔悴，形容枯槁，漁父見而問之曰，子非三閭大夫歟，何故而至此，屈原曰，舉世混濁而我獨清，衆人皆醉而我獨醒，是以見放，漁父曰，夫聖人者，不凝滯於物而能與世推移，舉世混濁，何不隨其流而揚其波，衆人皆醉，何不餽其糟而啜其醢，何故懷瑾握瑜而自令見放爲，屈原曰，吾聞之，新沐者必彈冠，新浴者必振衣，人又誰能以身之察察，受物之汶汶者乎，寧赴常流而葬乎江魚腹中耳，又安能以皓皓之白而蒙世之溫蠖乎

令尹子蘭之を聞いて大いに怒り、卒に上官大夫をして屈原を頃襄王に短らしむ。頃襄王怒りて之を遷す。屈原江濱に至り、被髮して澤畔に行吟す。顔色憔悴し、形容枯槁す。漁父見て之に問ひて曰く、子は三閭大夫に非ずや。何の故にして此に至る、と。屈原曰く、舉世混濁にして我獨り清む、衆人皆酔ひて我獨り醒む。是を以て放たる、と。漁父曰く、夫れ聖人は物に凝滯せずして、能く世と推し移す。舉世混濁なる、何ぞ其の流れに隨ひて其の波を揚げざる。衆人皆酔ふ、何ぞ其の糟を餽ひて其の醢を啜らざる。何の故に瑾を懷き瑜を握りて、自ら放れしむるを爲す、と。屈原曰く、吾之を聞く、新たに沐する者は必ず冠を弾き、新に浴する者は必ず衣を振ふ、と。人又誰か能く身の察察を以て、物の汶汶なるを受けん。寧ろ常流に赴いて江魚の腹中に葬られんのみ。又安んぞ能く皓皓の白きを以て世の溫蠖を蒙らんや、と。

ここでは、若干の字句の異同はあるものの、『楚辞』「漁父」の一部がほぼそのまま挿入される。屈原の入水前の描写と考えられ、水辺を行く被髪屈原、所謂「行吟像」のイメージの源泉となる。  
jushihunzhuoerwoduqing zhongrenjiezuierwoduxing xinnuzhebitanguan xinyuzhebizhenyi  
〔舉世混濁而我獨清〕〔衆人皆醉而我獨醒〕〔新沐者必彈冠〕〔新浴者必振衣〕は、世俗に阿ることを潔しとしない、高潔の士の人格を象徴するフレーズとなっていく。続いて、「懷沙」が王逸『楚辞章句』が伝えるものとは若干の字句の異同はあるが、ほぼそのまま引かれる。

第七段 乃作懷沙之賦，其辭曰，陶陶孟夏兮，草木莽莽，傷懷永哀兮，汨徂南土，胸兮窈窈，孔靜幽墨，冤結紆軫兮，離愍之長鞠，撫情效志兮，俛詘以自抑

乃ち懷沙の賦を作る。其の辭に曰く、陶陶たる孟夏、草木莽莽たり。傷懷して、永く哀しむ。汨として南土に徂く。胸して窈窈たり、孔だ靜かにして幽墨なり。冤結紆軫して、愍ひに離りて長く鞠まる。情に撫ひ、志を效し、俛詘して以て自ら抑ふ。

第八段 剗方以爲圓兮，常度未替，易初本由兮，君子所鄙，章畫職墨兮，前度未改，內直質重兮，大人所盛，巧匠不斲兮，孰察其揆正，玄文幽處兮，矇謂之不章，離婁微睇兮，瞽以爲無明，變白而爲黑兮，倒上以爲下，鳳皇在笱兮，雞雉翔舞，同糅玉石兮，一槩而相量，夫黨人之鄙妬兮，羌不知吾所臧

方を剗り以て圓と爲すも、常度未だ替はず。初本の由を易ふるは、君子の鄙しむ所。畫を章かにし墨を職して、前度改めず。内直にして質重なる、大人の盛とする所。巧匠斲らざる、孰か其の揆正を察せん。玄文幽處する、矇は之を章ならずと謂ふ。離婁の微睇す、瞽は以て明無しと爲す。白を變じて黒と爲し、上を倒にして以て下と爲す。鳳皇は笱に在り。雞雉は翔舞す。玉石を同糅し、一槩にして相量る。夫れ黨人の鄙妬する、羌に吾が臧き所を知らず。

第九段 任重載盛兮，陷滯而不濟，懷瑾握瑜兮，窮不得余所示，呂犬羣吠兮，吠所怪也，誹駿疑桀兮，固庸態也，文質疏內兮，衆不知吾之異采，材樸委積兮，莫知余之所有，重仁襲義兮，謹厚以爲豐，重華不可悟兮，孰知余之從容，古固有不並兮，豈知其故也，湯禹久遠兮，邈不可慕也，懲違改忿兮，抑心而自彊，離潛而不遷兮，願志之有象，進路北次兮，日昧昧其將暮，含憂虞哀兮，限之以大故

重載に任じて盛なるも、陷滯して濟らず。瑾を懷き瑜を握り、窮して余が示ぐる所を得ず。呂犬の羣吠す、怪しむ所を吠ゆるなり。駿を誹り桀を疑ふは、固より庸態なり。文質内に疏すれども、

衆吾の異采を知らず。材樸委積すれども、余の有る所を知る莫し。仁を重ね義を襲ね、謹厚以て豊を爲す。重華悟ふべからず。孰か余の従容たるを知らん。古より固に並ばざる有り。豈に其の故を知らんや。湯禹は久遠にして、邈として慕ふべからざるなり。違に懲り忿を改め、心を抑へて自ら彊む。潛きに離うて遷らず、志の象る有るを願ふ。路に進み北次す、日昧昧として其れ將に暮れんとす。憂を含み哀を虞しみ、之を限るに大故を以てす、と。

〔任重載盛兮，陷滯而不濟〕は、「屈原傳」の始めに見える懷王の信任厚き故に他の重臣の妬みをかう、という記述を支える。〔古固有不並兮〕〔湯禹久遠兮，邈不可慕也〕は、「離騷」の中に堯舜や三后の徳を称える文辞があることと併せ、儒学的価値に引き寄せた後世の屈原忠臣説を導くことになる。〔限之以大故〕の〔大故〕を王逸は〔大故謂死亡也〕と注しているが、司馬遷の解釈も前後の文脈から推すと同じであると考えられる。

第十段 亂曰，浩浩沅湘兮，分流汨兮，脩路幽拂兮，道遠忽兮，曾唵恆悲兮，永歎慨兮，世既莫吾知兮，人心不可謂兮，懷情抱質兮，獨無匹兮，伯樂既歿兮，驥將焉程兮，人生有命兮，各有所錯兮，定心廣志，余何畏懼兮，曾傷爰哀，永歎喟兮，世溷不吾知，心不可謂兮，知死不可讓兮，願勿愛兮，明以告君子兮，吾將以爲類兮

亂に曰く、浩浩たる沅湘、分れて流れて汨たり。脩路幽拂し、道遠忽たり。曾ち唵じ恆に悲しみ、永く歎慨す。世既に吾を知る莫く、人心謂ふべからず。情を懷き質を抱き、獨り匹無し。伯樂既に歿す。驥將た焉かに程らん。人生命有り、各錯する所有り。心を定め志を廣め、余何を畏懼せん。曾ち傷み爰に哀しみ、永く歎喟す。世溷って吾を知らず。心謂ふべからず。死の讓るべからざるを知る。願はくは愛しむ勿けん。明らかに以て君子に告ぐ、吾將に以て類を爲さんとす、と。

〔知死不可讓兮 ……吾將以爲類兮〕は、屈原の辞世の語として読まれ、自殺説の根拠となる。

第十一段 於是懷石遂自投汨羅以死……數十年竟爲秦所滅  
屈原が「石を抱き<sup>3</sup>」、汨羅江に入水した後、数十年で楚は亡んだ。楚には宋玉、唐勒、景差などがいて、屈原の賦の流れを汲む辞で知られたが、彼らの辞は技巧を凝らすものの屈原の直言の精神を継ぐものではなかった。司馬遷はこのように屈原の伝を結んだ後に続けて、百数十年後に生きた前漢賈誼の伝を載せ、併せて一卷とする。

第十二段 自屈原沈汨羅後百有餘年，漢有賈生，爲長沙王太傅，過湘水，投書以弔屈原

屈原汨羅に沈んでより後百有餘年、漢に賈生有り、長沙王の太傅と爲る。湘水を過ぎ、書を投じて以て屈原を弔ふ。

「長沙王太傅」は、賈誼が「弔屈原賦」を作った時の官職。この始まり方は、〔過湘水，投書以弔屈原〕が賈誼がこの巻に登場する所以であることを示す。

第十三段 賈生名誼……為賦以弔屈原，其辭曰

続けて、賈誼の名、出身地が述べられ、年若くして諸家の学に通じ、二十余才で文帝の博士となり、その年の内に太中大夫に抜擢されるという異例の昇進を遂げたこと、秦の旧制を改め新しく諸制度を定めようとしたこと、一時は文帝の発する政令は殆ど賈誼から出たものであったこと、重臣たちの言によって一転して帝から疎んじられ、当時は南方の後進地であった長沙に赴任するまでが述べられる。細部は異なるが、秀でた能力によって君主の信任を得る、大任を担う（法令の制定）、他の重臣の言を容れて君主が一転して遠ざける、左遷の憂き目に遭う、という主軸は共通している。賈誼は都を去って長沙に赴くが、長沙が低地で湿気が多いと聞き、短命を覚悟する。また、左遷であるため心中鬱屈するものがあつた。湘水を渡るに及んで〔為賦以弔屈原〕<sup>weifuyidiaoquyuan</sup>（賦を作つて屈原を弔う）。

第十四段 共承嘉惠兮，俟罪長沙，側聞屈原兮，自沈汨羅，造託湘流兮，敬弔先生，遭世罔極兮，乃隕厥身，嗚呼哀哉，逢時不祥，鸞鳳伏竄兮，鷗臯翱翔，闢茸尊顯兮，讒諛得志，賢聖逆曳兮，方正倒植，世謂伯夷貪兮，謂盜跖廉，莫邪爲頓兮，鉞刀爲銛，于嗟嚶嚶兮，生之無故，幹弃周鼎兮，寶康瓠，騰駕罷牛兮，驂蹇驢，驥垂兩耳兮，服鹽車，章甫薦屨兮，漸不可久，嗟苦先生兮，獨離此咎

共んで嘉恵を承け、罪を長沙に俟つ。側かに聞く屈原、自ら汨羅に沈むと。造りて湘流に託し、敬んで先生を弔ふ。世の罔極に遭ひ、乃ち厥の身を隕す。嗚呼哀しい哉、時の不祥に逢ふ。鸞鳳は伏竄し、鷗臯は翱翔す。闢茸は尊顯せられ、讒諛は志を得。賢聖は逆曳せられ、方正は倒植せらる。世伯夷を貪と謂ひ、盗跖を廉と謂ふ。莫邪を頓と爲し、鉞刀を銛と爲す。于嗟嚶嚶として、生の故無き。周鼎を幹弃し、康瓠を寶とす。罷牛に騰駕し、蹇驢を驂にす。驥は兩耳を垂れ、鹽車に服す。章甫を屨に薦ぐ、漸く久しかるべからず。嗟苦しきかな先生、獨り此の咎に離ふ。

この段からは、賈誼の「弔屈原賦」全篇を引く。この賦が以後の〔為賦以弔屈原〕の風を啓く。<sup>weifuyidiaoquyuan</sup>  
〔鸞鳳伏竄兮，鷗臯翱翔〕は、「懷沙」の〔鳳皇在笱兮，雞雉翔舞〕を踏まえると考えられる。<sup>luanfengfucuanxi chixiaoaoxiang fenghuangzainuxi jizhixiangwu</sup>  
〔闢茸一賢聖〕〔讒諛一方正〕〔伯夷一盜跖〕〔周鼎一康瓠〕という肯定的価値を持つものと否定的価値を持つものとの位置の顛倒の組み合わせを畳み掛けていく表現には、「離騷」の直接的影響が伺われる。

第十五段 訊曰，已矣，國其莫我知，獨埋鬱兮其誰語，鳳漂漂其高遯兮，夫固自縮而遠去，襲九淵之神龍兮，沕深潛以自珍，彌融爚以隱處兮，夫豈從螻與蜉蝣，所貴聖人之神德兮，遠濁世而自藏，使騏驥可得係羈兮，豈云異夫犬羊，般紛紛其離此尤兮，亦夫子之辜也，矚九州而相君兮，何必懷此都也，

鳳皇翔于千仞之上兮，覽熹輝而下之，見細德之險  
微兮，搖增翮逝而去之，彼尋常之汗瀆兮，豈能容  
吞舟之魚，橫江湖之鱣鱒兮，固將制於螻蟻

訊げて曰く、已まん。國其れ我を知る莫し。獨り堙鬱として其れ誰にか語らん。鳳は漂漂として其れ高く遶み、夫れ固に自ら縮して遠く去る。九淵を襲ぬるの神龍は、沕として深く潜んで以て自ら珍とす。融爚を彌くして以て隠處す、夫れ豈に螻と蛭蟻とに從はんや。貴ぶ所は聖人の神徳、濁世に遠けて自ら藏る。騏驥をして係羈を得べからしむる、豈に夫の犬羊に異なりと云はんや。般として紛紛其れ此の尤に離ふ、亦た夫子の辜なり。九州を睇て君を相くる、何ぞ必ずしも此の都を懷はん。鳳皇は千仞の上に翔り、徳輝を覽て之に下る。細徳の險微を見れば、翮を搖増し逝きて之を去る。彼の尋常の汗瀆は、豈に能く吞舟の魚を容れんや。江湖に横はるの鱣鱒も、固に將に螻蟻に制せられんとす。

banfenfengliciyouxi yifuzizhiguyejuzhouerxiangjunxi hebihuaiciduyej  
〔般紛紛其離此尤兮，亦夫子之辜也，睇九州而相君兮，何必懷此都也〕は、屈原の選択への批判に繋がる。今に伝わる中では最も時期の早いものとなる。

第十六段 賈生爲長沙王太傅三年……至孝昭時，列爲九卿

この段では、賈誼が長沙赴任中に作ったもう一つの賦「服鳥賦」が、賈誼の人生観を示すものとして引かれ、その後一年余りで都に召されたこと、改めて文帝が寵愛する末子の梁懷王の太傅に任じられたこと、その懷王の事故死に落胆して三十三歳で夭逝したことが急ぎ足で述べられ、子孫のその後を簡略に付して伝は終わる。

第十七段 太史公曰，余讀離騷天問招魂哀郢，悲其志，  
適長沙，觀屈原所自沈淵，未嘗不垂涕，想見其爲  
人，及見賈生弔之，又怪屈原以彼其材，游諸侯，  
何國不容，而自令若是，讀服鳥賦，同死生，輕去就，  
又爽然自失矣

太史公曰く、余、離騷、天問、招魂、哀郢を讀みて、其の志を悲しむ。長沙に適き、屈原自ら沈む所の淵を觀て、未だ嘗て涕を垂れ、其の人と爲りを想見せずんばあらず。賈生の之を弔ふを見るに及びて、又怪しむ屈原彼の其の材を以て、諸侯に游ばば、何れの國か容れざらん。而るに自らはの若くならしむを。服鳥の賦を讀むに、死生を同じうし、去就を輕んず。又爽然として自失す。

以上、『史記』「屈原傳」を検討して明らかになるのは、二点である。まず、屈原の事跡に関する具体的記述に乏しく、屈原作とされた楚辞を伝に取り込むことで成立していること。前半の「離騷」創作の経緯とその評価を述べる部分には「離騷」原文の直接の引用はないが、屈原が立たされる苦境は、伝中にはその記述を支える情報はなく、「離騷」の意境を念頭に置かなければ成り立たない。後半は、「漁父」「懷沙」の二篇が本文に引用されて、屈原の生涯を再構成する資料として、特に入水自殺の根拠として使われている。第四段は他の段に比較して具体的記述は多いが、詳述されるのは戦国末の秦楚間の駆け引きと楚王室の内情であり、屈原の事蹟自体に関してはやはり具体的記

述に乏しい。

次に、賈誼の伝と併せて一卷とすることで、人生の一類型を示す列伝となっていること<sup>4</sup>。両者は生きた時代も異なり、その境遇は完全に同じ訳ではないが、その共通項を挙げると、秀でた能力（及び高潔な人格）によって君主の信任を得る、大任を担う、（小人の）妬みをかう、讒言される、君主が一転して遠ざける、左遷の憂き目に遭う、となる。賈誼伝は屈原伝の後日談的役割も果たしており、後世にレクイエム（屈原を悼むことで、自らの不遇を屈原のそれに擬える、或いは屈原の人格を称え、自身のそれを屈原のそれに擬える）の伝統を導くことになる。

注：

- 1 趙達夫『屈原与他的时代』（人民文学出版社、1996年）は、先秦史料から屈原の事跡及び言動を拾い出す試みを行っている。
- 2 王逸『楚辞章句』が伝える「漁父」は追放された屈原が沼沢のほとりで漁夫と問答を交わす体になっているが、『史記』では、これに続く漁夫の答えは引かれない。
- 3 「懷沙」は、この「懷石遂自投汨羅以死」、東方朔「七諫」の「懷沙礫而自沈兮」から、「言懷抱沙石以自沈也」（朱熹『楚辞集註』）と解釈される。
- 4 『史記』列伝中、血縁のない複数の人間の伝を一巻にしているものは、二種類に大別出来る。一つは、巻67「仲尼弟子列傳」、巻86「刺客列傳」などのように、ある集団や人間の類型を巻名として掲げるもの。もう一つは、巻63「老子韓非列傳」、巻35「樊鄴滕灌列傳」などのように、個人名を列記するものである。これらもやはり前者は、春秋戦国期の思想家、後者は漢の高祖に仕えた功臣というように、一つの共通項を持つ1グループである。その中で巻84「屈原賈生列傳」は、二人の人間の伝が一巻にされているが、両者の生きたとされる時代は、屈原が諸説あるがほぼ前340～前277年、賈誼が前200～168年と百年もの隔たりがあり、列伝中でも特異な存在である。

## おわりに

小稿では、漢代における屈原像の祖型の成立をみるための第一段階として、一章で先秦期から漢代にかけて行われた屈原及び屈原賦理解を伝える文献史料を、二章で司馬遷『史記』「屈原賈生列傳」を検討した。二章で明らかになったように、屈原評価の中心となる屈原の人格は、代表的屈原賦である「離騷」の意境を内部に取りこむことで成り立っている。次段階では、この「離騷」世界を検討する。更に、賈誼に始まる〔wcifuyidiaoquyuan 為賦以弔屈原〕<sup>1</sup>の行為は前漢には一つの文学的伝統を形成し、後漢には早くも班固、揚雄らから後代に繰り返される屈原批判の基調となる批判が出され、王逸『楚辞章句』が儒学的立場からの擁護・称揚と注釈を行い、これも後代の屈原評価の基調を形成する。次段階では、ここまでを「漢代における祖型の成立」としてまとめたい。

注：

- 1 「招魂」を屈原の弟子である宋玉が屈原の魂を招くために作ったとする説（王逸『楚辞章句』）

などもあるが、本稿では、<sup>weifuyidiaoquyuan</sup>〔為賦以弔屈原〕を屈原を弔う言辞の創作行為が自らの社会生活（主に官途）の不遇を屈原の類型に引き寄せて嘆くことに繋がることを核心として含むものに限定して考える。

#### 参考文献

- 重野安校訂『史記』（漢文大系第六巻）富山房、明治44年  
岡田正之校訂『楚辭』（漢文大系第二十二巻）富山房、大正五年  
星川清孝『楚辭』（新釈漢文大系34巻）明治書院、昭和45年  
姜亮夫編著『楚辭書目五種』上海古籍出版社、1993年  
李中华、朱炳祥『楚辭学史』武汉出版社、1996年  
金開誠、董洪利、高路明『屈原集校注』中華書局、1996年  
劉勰著、范文瀾註『文心雕龍註』人民文學出版社、1996年  
赵逵夫『屈原与他的时代』人民文学出版社、1996年